

「この人 52」

宇佐美 徹郎 86歳 静岡県

編集部 俳句を始められたのは？

宇佐美 昭和四十年、公立高校で教鞭をとっていた頃、同僚に勧められて「静岡逝く春会」に入会しました。「洗ひ物干す妻の腕風光る」がいきなり高得点になり、面白くなって毎回出席しました。

編集部 滑稽俳句を始められたきっかけは？

宇佐美 国語を教えておりましたので、俳句は「俳諧の連歌の発句」から出た言葉で、俳諧とは、「滑稽な」「ユーモアのある」くらいの意だとは知っておりました。「蕉風」以前の「談林」とか、芭蕉の「軽み」が、それに当るのではないかなどと勝手に考えておりましたが、「俳壇」の「微苦笑俳壇」を見て、まさにこれだと思いました。

編集部 滑稽俳句の魅力は？

宇佐美 「ユーモア」は「ヒューマニズム」からきていますが、その「人間性」のもつ特徴の一つに「和やかな笑いの世界をもたらす本性的なもの」があり、そこに惹かれるのだと思います。

編集部 滑稽俳句を作るコツは何でしょうか。

宇佐美 「微苦笑俳壇」に「大仏も迷惑顔の煤払ひ」をとっていただいた時、ああ、こういう直観的に感じたことを掴めばいいのだなと思いました。あまり拘らないで、ふと気づいた微苦笑をそのままさっと掴むとよいと思います。

<代表句>

緑蔭に甕酒を汲む無頼かな
箱潜るだけで風物心太
ドラキュラも棺を出でしや今日の月
不機嫌な夫婦に林檎届きけり
菊の香や木に戻りたる朽ち仏